

海外体験学習プログラム企画立案、実施運営の分析： 「多文化フィールドスタディー（フィリピン）」

小張 順弘

1. はじめに

大学教育における教室外での学びの場の重要性は以前より認識され、通常の教室外での学習経験を積極的に取り入れようとする試みは様々な形で行われてきている¹⁾。海外体験学習には、「長期留学」「語学留学」「インターンシップ、社会起業体験」「海外研修（フィールドスタディー）」「サービスマーケティング」「ワークキャンプ/ボランティア」「スタディツアー」「ワーキングホリデー」「バックパック旅行」などの多様な形態が含まれ、実施主体、期間、研修先、単位化の有無、学習方法、効果も様々である²⁾。大学教育における海外体験学習は、「日本国内の大学における多様な教育方法の一つとして、外国大学への留学及び外国語習得以外の目的で大学の責任の下に提供される海外体験での学習（学習の機会を与える教育）³⁾」と定義され、これは本稿で対象とする亜細亜大学の正規科目（単位認定科目）であるフィールドワークを通じた異文化理解を深める教育活動にも当てはまる。

「海外体験学習」研究会（2004年発足）は、海外体験学習における課題について①教育としての理念、内容、方法、評価等に関する現状認識と改善の模索、②学生の受入れ先の検討、ならびに受け入れ先との関係構築、③危機管理の強化のための方策、④学内体制のあり方を指摘しており、これらはここで考察する海外体験学習プログラムの企画立案、実施運営においても欠く

ことのできない重要な視点である。

亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学科は、2012年4月の学科開設以来、中国・韓国・ベトナム・フィリピンを対象国とした「多文化フィールドスタディー（以下、多文化FS）」（通年4単位、夏季休暇中に1週間程度の現地訪問）が3年生以上履修可能な正規科目としてカリキュラム内に配置され、2014年度に初めて開講された。実施年度によっては諸事情により中止となった地域もあったが、2019年度には新たにアメリカも追加され、5地域において1～2週間程度の日程で2年生以上を対象とした海外体験型学習プログラムとして実施している。各地域ごとに異なる学術分野を専門（社会学、文化人類学、地理学、言語学、歴史学）とする教員が担当しているため、科目の趣旨、科目到達目標、授業方法を共有しつつ、担当教員ごとに企画立案、実施運営、通年の指導を行っている。

大学内の座学を中心とする講義形式の教育方法とは異なり、「海外での体験型形式の学び」には、参加者の健康管理、安全管理、危機管理などに留意する必要がある。また、現地での活動を円滑に進めるための調整・連絡（日程管理）、滞在中の費用に関する諸手配（予算管理）といったプログラムコーディネーターとしての役割も担う。特に、東南アジア諸国の途上国では、「気象条件」「食文化の違い」「インフラの未整備」「文化的な感覚の違い（人間関係、時間的感覚など）」「意思疎通の難しさ」など様々な状況が日本とは異なり、予定調和的には物事が進まず、想定外の事態も多々起きる。参加学生にとっても、日本とは異なる現地の生活環境（衛生観念、社会的利便性・効率性など）の違いですら、精神的な負担ともなりえる。このような現地状況のなか、担当教員には海外渡航準備や現地滞在中の様々な役割や判断が求められる。

また、学生が「海外のフィールドで学ぶ」「フィールドから学ぶ」ことの教育的意義や重要性を認識しつつも、教育的効果の向上を目指すファシリテーターとしての学習機会の確保・提供には、多くの課題が含まれている現実に向き合わなくてはならない。さらに、参加学生たちが海外を訪問すれ

ば、自ずと主体的に学ぶというわけでもない。現地プログラムの企画立案、実施運営は、海外体験型学習の心臓部であり、現地での活動に血を通わせ、学生の学びを有意義なものとするための仕組みの構築が必要となる。

開発教育分野では、教師・指導者はプロデューサー、ファシリテーター、コーディネーター、対話者としての多様な役割を担うとされ⁴⁾、大学で実施する海外体験学習プログラムの担当教員にも通じている。教員はその教育的活動目的を精査し、適切な学びの仕組みを意識しながら複数の役割を担っている。このような課題や関心事に注目しながら、海外体験学習の心臓部にあたる現地プログラムの企画立案、実施運営過程に焦点を当て、担当教員としての立場から現地プログラムに関する様々な状況、感情を伴った認識や教育的/実務的判断について整理し、フィリピンでの海外体験学習プログラムの変遷と特徴について考察していく。

2. 本稿の目的

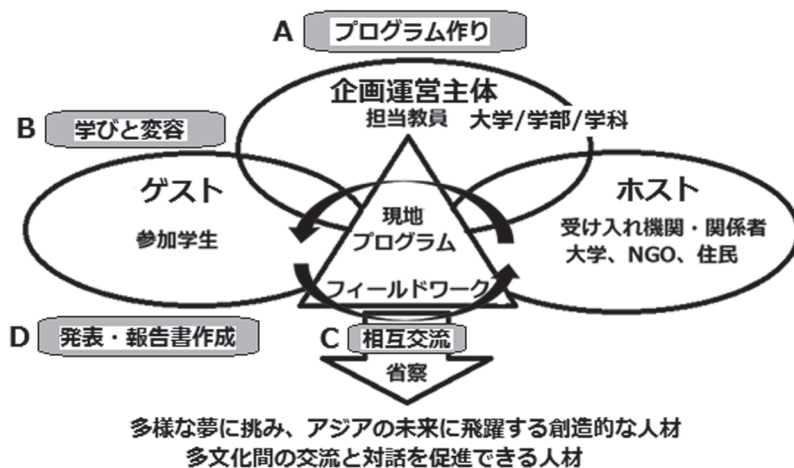
2-1. 本稿の位置づけ

国際理解教育から見た海外研修・スタディツアーについての研究では、ツアー企画運営主体（学校、大学、NGO、自治体、旅行会社など）、参加者としてのゲスト（生徒、学生、教員など）、参加者としてのホスト（現地コミュニティ、住民など）、実践内容としてのカリキュラム（プログラム内容）の4要素が指摘され、海外研修・スタディツアーに関する研究アプローチとして（A）プログラム作り（企画運営者が提供するカリキュラム）、（B）学びの変容（観光経験、学習体験）、（C）相互交流（ゲストとホストの交流）、（D）授業づくり、実践・学びあい（注：教師海外研修の場合の研修成果）の領域が示されている⁵⁾。

これらの領域分類と研究アプローチを参考に、「多文化FS（フィリピン）」に関する全体構図を提示し、本稿で扱う研究領域（A プログラムづくり）の位置づけを以下に示したい。海外研修・スタディツアーに関する研究枠組み

には、国際理解教育の目的として「社会参加・参画」「地球市民（グローバル・シティズンシップ）の育成」が挙げられているが、以下の図では亜細亜大学の教育目標、国際関係学部多文化コミュニケーション学科のディプロマ・ポリシーを踏まえて、大学教育機関としての教育目的を反映する形で修正を加え、フィリピンでの海外体験学習プログラムの全体像の把握を試みた⁶⁾ (図1)。

図1. 多文化FS（フィリピン）の4要素と4つの研究アプローチ



(藤原、2014 年を修正して作成)

本稿は図1の「A プログラム作り」に該当し、現地プログラムの企画立案と運営主体（学科教員）による実施運営に関する自己省察を試みるものである。「B 学びと変容」「C 相互交流」「D 発表・報告書作成」は含まれない。

2-2. 研究課題

今回の研究では、2013 年度実施のゼミ合宿形式で試験的に実施されたフィリピン訪問から、2014 年度の「多文化FS（フィリピン）」科目初開講、そ

して2019年度現地訪問まで間の7年間で6回(2016年度開講中止)実施した現地プログラムを考察対象とする。学科カリキュラム内における「総合的科目」として位置づけと「共通シラバス内容」(科目の趣旨、授業の内容、科目到達目標、授業方法など)の共有枠組のなかで、フィリピンでの現地プログラムを担当してきた筆者の経験について整理し、その変遷と特徴の把握を試みる。具体的には、以下の3項目について明らかにする。

- (1) 亜細亜大学の学科カリキュラムにおける「多文化FS(フィリピン)」の位置づけと意義
- (2) 「多文化FS(フィリピン)」科目内のフィールドワークを中心とする現地プログラム準備段階から、企画立案、実施運営における、担当教員の経験や個人的認識にもとづく判断の経年変化
- (3) 「多文化FS(フィリピン)」の企画立案、実施運営上の特徴

2-3. 研究方法：自己エスノグラフィー(オートエスノグラフィー)

上記の3項目について、自己エスノグラフィーの手法を用いて、海外体験学習プログラムの担当者としての自己省察を行い、その作業をもとに特徴を捉え、経年変化の軌跡を整理する。「自己エスノグラフィー」とは「調査者自身を研究対象とし、自身の主観的な経験について、『私』がどのように、なぜ、何を感じたのかという自己帰納的に考察することを通して、文化的・社会的理解を深める質的研究方法⁷⁾」であるとし、その特徴は以下のように記されている。

私の存在が全面に登場し、調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法であり、自分の感情を振り返り、呼び起こす、内省的な行為として特徴づけられ、その目的は自分の経験を振り返り、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかということを探ることを通して、文化的・社会的文脈の理解を深めることを目指している。(104～105ページ)

また、自己エスノグラフィーは「個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示するもの⁸⁾」とされ、厳密にはその類型や用語の定義について研究者間でも一致していない現実がある。しかし、この手法は、社会科学（社会学、文化人類学・教育・医療・保育分野など）で主に使用され、科学的研究手法として客観的かつ中立的な研究手法が正当視される状況において、主観的見地からの新たな学術的貢献が注目されており、質的調査方法の一つとしてその使用領域は徐々に拡大してきている。この手法の利点は、①当事者の視点から現象を描ける点、②主観的で感情的な経験の記述することを通して、筆者自身の経験に対する意味付けを表せる点にある⁹⁾。一方で課題もあり、「自己中心的でナルシスティックな行為」になる傾向により、研究の社会への還元性の問題が生じることや「研究手法の多様性による一貫性の欠如」による学問的価値判断の困難さを伴うとの指摘もある¹⁰⁾。

これらを踏まえつつ、自己エスノグラフィー手法を用いることで、現地プログラム担当者としての視点からプログラムの実践記録・事例報告にとどまらず、現場での「感情の起伏」や引率者・責任者として行った「状況に対する理解」「状況判断に基づく行動」も含めた実践知を自己再帰的に考察し、その特徴や傾向を整理して今後の実施に向けて意識化することを試みる。さらに、学部生を対象とした海外体験学習の実践を当事者（内部）の視点から描き出すことにより、同様の海外体験学習の企画立案、実施運営の一例として、実践知共有の可能性を開くことを視野に入れたい。

2-4. 研究資料

筆者が作成した3種類の資料、①各種報告書、②「多文化FS（フィリピン）」紹介のエッセイ、③現地滞在中の全般に関する個人ノートを主な分析対象とする。各種報告書には、客観的視点や他人の目線を意識した記述があるが、その多くの部分には現地プログラムの担当者としての関心事項が記載されており、また担当者としての判断も記されている。したがって、記載根拠、状況認識、判断などを振り返るための資料として貴重な記録であると考

える。エッセイには、担当教員からの見た学生の様子や現地プログラムに対する私見が含まれており、当時の認識や感情が部分的に反映されている。また、個人ノート（フィールドノートに近い）には、現地プログラムの実施・運営に必要な実務的な情報（日程、連絡先、費用など）、滞在中の学生の様子・言動などの観察事項が記録されており、自分自身を再帰的内省的に振り返る際の一次資料として捉えることができる。これら3種類の資料を手掛かりとし、現地プログラムの企画立案、実施運営に関する変遷や特徴について具体的な考察を行う。

3. 亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学科の「多文化FS」科目

亜細亜大学のカリキュラム・ポリシーの教育内容には、「高度な専門知識・技能を身につけさせるために、各学部・学科の専門分野の体系に基づいて科目を配置する」「(各種留学・研修制度などを通じて) 価値観の多様性を尊重し、国際社会に貢献できる国際教育を行う」ことが掲げられ、その教育方法として「学生の主体的な学びを促す教育手法を工夫」し、「地域(学外)の教育資源を活用する教育プログラムを開発する」とある¹¹⁾。また、2012年度～2016年度の5年間には、アジアの共生に貢献し、新たな価値を創造する「行動力あるアジアグローバル人材」育成を掲げる国際関係学部を中心とした教育プログラムが文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業としての採択を受け、教育体制や危機管理体制の整備が行われた¹²⁾。

国際関係学部多文化コミュニケーション学科では、「国内外における体験型学習科目」を配置し、学内の学習のみならず、学外での主体的学習機会の提供を意図したカリキュラムが編成されている。通年開講の「多文化FS」科目は複数地域で実施され、共通するシラバス内容（前期は「事前学習」、夏季休暇中に「現地訪問」、後期に「事後学習」）に基づき開講されている。

前期の事前学習では訪問国に対する理解促進、(海外) フィールドワークの準備、夏季休暇中の現地訪問では1週間程度の海外調査、後期の事後学習では成果報告発表、報告書作成という流れに沿って運営されている。以下、シラバス上記載の共通事項(科目の趣旨、授業の内容、科目到達目標、授業方法)を抜粋する(表1)。

表1. 「多文化フィールドスタディー」科目のシラバス(項目及び説明)

項目	説明
科目の趣旨	本科目では、海外での実習を通し、様々な異文化現場での調査・研究や課題の遂行能力を養わせる。そのため、まず、研究テーマの設定、テーマに関する知識や情報の収集、研究計画書やアンケート・インタビュー項目の作成、異文化における調査スキルの習得など、主に方法論を重点的に学習する。そして、自ら選定した各自の研究課題を、夏季休暇期間中の1週間を利用し、同行の担当教員の指導を受けながら海外で検証する。その後、海外での調査結果を分析し、プレゼンテーションを行う。そして、最終的には、研究報告書を作成・提出する。同一科目として、異なる地域を対象とするものを複数同時開講し、各自の関心領域から選ぶことができるようにする。
授業の内容	自ら課題を選定する力、自文化と異文化の差異を見極める力、現地社会を理解する力、あらゆる問題に果敢に挑戦する力、さまざまな失敗を克服する力、獲得した資料を分析する力、大勢の前で堂々と発表できる力などを学んでいきたい。
到達目標	本科目は、現地感覚を持って、日本とアジア地域をつなぐことができる「行動力あるアジアグローバル人材」育成を目指している。具体的には、授業を通し、異文化研究のための方法論を修得することと同時に、研究対象地域への理解を深め、現地適応力向上を目指す。なお、夏季フィールドワークの調査結果を分析し、公の場でプレゼンテーションできる能力を身につける。

授業方法	前期中は、簡単な実習やグループワークを取り入れながら、異文化研究のための方法論を学習する。そして後期においては、資料分析やプレゼンテーションスキルを高めることを主な課題として取り組む。
------	--

(亜細亜大学 HP 上掲載の「シラバス」より作成)¹³⁾

科目の趣旨には、「研究テーマの設定、テーマに関する知識や情報の収集、研究計画書やアンケート・インタビュー項目の作成、異文化における調査スキルの習得など、主に方法論を重点的に学習する」ために、海外での1週間程度の滞在を通じた調査活動による結果を分析し、プレゼンテーションの実施や報告書の作成を行うという一連の流れを通じて、「海外での実習を通し、様々な異文化現場での調査・研究や課題の遂行能力を養う」ことを目指している。また、異なる地域への興味・関心から、複数国（中国・韓国・ベトナム・フィリピン・アメリカ）から選択することができるよう同一名称科目で国別に配置されている（2019年度時点）。

また、到達目標は、「現地感覚を持って、日本とアジア地域をつなぐことができる『行動力あるアジアグローバル人材』育成を目指す」とされ、①異文化研究のための方法論を修得すること、②研究対象地域への理解を深め、現地適応力を向上させること、③夏季フィールドワークの調査結果を分析し、公の場でプレゼンテーションできる能力を身につけるとの具体的な目標が設定されている。

実施国別の担当教員により授業計画詳細に多少の違いはあるものの、前期には前期ガイダンス、フィールドワーク方法論、現地社会の理解、フィールドワークの準備、前期まとめ、夏季休暇中に海外での現地調査、後期に後期ガイダンス、調査資料の分析、プレゼンテーション準備、プレゼンテーション、後期総括を実施することが共有されている。このうち夏季休暇中の現地滞在中の活動内容、事前準備・手配の方法は実施地域ごとに異なるが、筆者が担当するフィリピンでの事例をもとにして、科目運営に必要な項目を「教

育的指導」「教員作業」「共通作業」に分けて、通年の流れに沿って整理し、現地プログラムの企画立案、実施運営の位置づけを明確にする。下表（表2）の網掛け部分が本稿での考察対象となっている。

表2. 「多文化FS（フィリピン）」における通年科目の流れ

実施時期 内容	前期 事前学習	夏季休暇 現地プログラム	後期 事後学習
教育的指導	事前指導 フィールドワーク方法 異文化理解（フィリピン）	現地指導 フィールドワーク 体験学習活動 ミーティング	事後指導 調査分析/まとめ プレゼンテーション 報告書作成
教員作業	企画立案 日程・活動案作成 現地との調整作業 パスポート・査証確認 フライト、宿舎、車両予約 見積作成/参加費徴収	実施運営 健康管理 安全管理 危機管理 日程管理(各種調整、手配) 予算管理	会計報告 会計精算 会計監査 清算（追加徴収/返金）
共通作業	保護者からの参加承諾書 海外旅行保険申込		保険申請手続き

前期の事前指導のほか、共通作業として海外旅行保険、保護者の参加承諾書に関する合同説明会、後期の事後指導では学生による成果報告会（地域別に発表）が実施されている。報告書については、担当教員別に個別/グループを対象とした作成指導が行われている。授業内の指導は国別に担当している教員の裁量が大きく、現地プログラム内容も自由度が高く、担当者の特性が反映しやすい状況となっている。

4. 「多文化FS（フィリピン）」担当教員の背景

フィールドスタディーではフィールドワーク調査を通じた異文化理解を目

的とし、担当教員による基礎的な指導のほか、個人的背景が現地プログラムに反映される。ここでは、現地プログラム内容との関連性が高い筆者の背景（専門学術分野、フィールドワーク経験）について簡略に紹介する。

4-1. 専門学術分野の特徴

筆者の専門分野は言語学に大別され、さらには応用言語学（言語教育）、社会言語学となる。主にフィリピンの多言語状況（多言語社会、多言語話者）に関心を抱き、社会言語学的調査研究に取り組んできた。言語教育法を学んだ後、応用言語学、社会言語学を中心として、フィリピン多言語社会や多言語話者に関する多言語状況（マルティリンガリズム/バイリンガリズム）を研究テーマとしている。応用言語学は、言語学を応用するという性格を持ち、主な対象は外国語教育であったが、現在では現実社会の問題解決に直接貢献する言語学としてより幅広く定義される¹⁴⁾。

また、社会言語学は体系づけられた理論や方法論を持たず、言語学と社会学に隣接する学際的テーマを対象として、ことばと社会的属性との関連性を読み取り、ことばの多様な姿を浮かび上がらせようとする視点を有する学術分野である。具体的には、①言語の多様さ、②言語の変化、③みずから言語を選択する人びとという話者モデル、④多言語社会という社会モデルへの「まなざし」を持つ学術分野である¹⁵⁾。社会言語学は言語を使用する人びとが属する社会も対象とする手法をとり、その根底には言語は社会的産物であるという認識がある。また、言語が使われる現場が重視され、その選択・使用に伴う様々な価値判断を探りつつ、話者の実態を明らかにしようと試みる。その際に浮かび上がる多様な言語の姿の記述を蓄積し、その「まなざし」を手掛かりにして「人・文化・社会」との繋がりを絶えず見つめなおす手法を用いる分野である。そのため、筆者はプログラムの企画立案、実施運営において、言語を重視する傾向が強い。

また、教育という観点からは、自らの言語学習経験や言語教育経験を通じて、“Learning by doing”（言語を使いながら学ぶ、実践的学習、体験学習）

という学習方法を重要視し、個々の学習者の好む学習方法は異なることは理解しているものの、教える側に立つときに、「体験を通じた言語学習方法」を好んで選ぶ傾向がある。

4-2. 筆者のフィールドワーク経験

フィールドワークは、人文科学・自然科学・医学などの様々な分野で質的研究方法として幅広く導入されており、言語学もその例外ではない。言語学にも調査対象言語の記述、言語資料収集を主な目的とした「フィールド言語学」や、社会学との関連分野では「社会言語学的フィールドワーク」など、それぞれの調査研究方法の特徴がある。社会言語学分野のフィールドワークは、主に①言語そのものの構造記述・分析、②その言語を使用する人々の文化・社会の理解、③言語と文化・社会的背景要因との関連性の理解を目的としてきた。言語研究の調査方法には、参与観察・インタビュー・アンケート、テストなどが含まれ、調査目的と条件に応じて方法を選んだり、組み合わせたりする。フィールドワークは、利用可能な様々な技法を用いて調査を行う「恥知らずの折衷主義¹⁶⁾」と呼ばれることもあるが、調査目的のためにそれぞれの技法の長所と短所を見極めて選び、様々な技法を併用する。また、言語学のみならず、隣接する学問領域（主に社会学、文化人類学、政治学、経済学、歴史学、地理学など）の理解も必要である。

筆者が行ってきたフィールドワークは言語に関する理解を目的とし、中長期間にわたり、調査目的のために諸準備を行い、収集した各種資料を分析し、課題の再検討を重ね、結論までの道筋を探求する学術的調査である¹⁷⁾。基本的には一人で実施するが、調査目的によってはインフォーマント（調査協力者）の協力を得ながら行うこともある。当然、それぞれの調査手法に対する得手不得手があるが、筆者はできるだけ多様なアプローチから最も適切な技法を選び、雑多な現実に向き合おうとする傾向が強い。個人的にはフリピン社会で使用される言語を手掛かりとする調査を得意技としているため、言語を通じた情報収集への偏重傾向、言語万能主義的傾向¹⁸⁾への注意

が必要であると考える。

5. 「多文化 FS（フィリピン）」の概要

2013年9月の海外ゼミ合宿で初めて学生とフィリピンを訪問し、2014年度からは「多文化 FS（フィリピン）」科目の一部として現地訪問を開始した。現在まで、現地大学との学術協定締結、フィリピン人大学生の日本訪問¹⁹⁾、協力先 NGO での聞き取り調査実施など、現地プログラムを安定的に実施運営するための協力体制の構築や実態把握に努めてきた。また、必要に応じて現地プログラムの修正変更を実施した。以下、2012年度の科目開講の準備開始から2019年度まで経緯概略を整理する（表3）。

表3. 「多文化 FS（フィリピン）」科目の主な経緯概略

年/月	目的	概要
2012年10月	視察訪問①	国際交流課職員と現地視察（マニラ、セブ）
2013年3月	視察訪問②	実施準備のための現地機関との調整
2013年9月		サンカルロス大学（セブ）との学術協定提携（新規）
2013年9月	現地訪問①	3・4年生海外ゼミ合宿（1回目訪問）
2014年9月	現地訪問②	第1回多文化 FS 実施（2回目訪問）
2015年9月	現地訪問③	第2回 FS 実施（3回目訪問）
2016年		2016年度開講中止
2016年4月		サンカルロス大学（セブ）より学生6名日本訪問
2017年3月	調査	NGO ホームステイ先聞き取り調査
2017年9月	現地訪問④	第3回 FS 実施（4回目訪問）
2018年9月	現地訪問⑤	第4回 FS 実施（5回目訪問）
2019年3月		聖マリア大学（マニラ）との学術協定締結（新規）
2019年3月		サンカルロス大学（セブ）との学術協定更新
2019年9月	現地訪問⑥	第5回 FS 実施（6回目訪問）

5-1. 「多文化 FS (フィリピン)」 事前準備段階

「多文化 FS (フィリピン)」の事前準備として2回の視察訪問を行い、ゼミ合宿として試験的に学生とともに現地プログラムを実施した。2012年10月及には国際交流課事務職員と現地視察をし、2013年3月には、同年9月のゼミ合宿実施を念頭にした現地機関との調整作業にあたった。ここでは「多文化 FS (フィリピン)」開講までの事前準備段階での視察の概要を整理し、現地プログラムの企画立案に関する経緯を明らかにする。

(1) 2012年10月 視察訪問

この事前視察²⁰⁾では学生引率時に予定している訪問先や活動の想定のもと、以下の調査項目(海外渡航、現地での移動・交通手段、宿泊施設、食事・飲料水、衛生状態、治安・危機管理、通信手段など)の状況確認や現地での活動予定地の現地機関(日本大使館、日系メディア、大学、NGOなど)との調整を主な目的としたものであった。フィールドワークではフィリピンの歴史や社会の仕組みなどの概要を理解したうえで、自分のテーマに沿った調査を行う方針を想定した。担当教員と国際交流担当職員との現地視察により、現地状況の再検討と現地プログラムの実現性や教育的効果の検証を複眼的視点から行った。また、2013年9月に海外ゼミ合宿による現地プログラムの試験的实施に向けて、現地機関からの協力を取り付けることができた。

(2) 2013年3月 視察訪問

2012年10月に続き、2013年3月の訪問では調査項目の現状再確認及び学生引率実施案をもとにプログラムの詳細について調整を行った。また、大学正規科目として、「この海外体験学習を大学教育の文脈にどのように位置づけるのか」を念頭に置き、日本で学ぶ大学生のフィリピン訪問の目的を設定した。国際関係学部の学生が持つ(であろう)興味を想定し、「フィリピンで何を見せるのか(フィリピンは何が見せられるのか)」「何を体験させ、どのような学びにつなげるのか」という観点と各種制限要素(時間的・物理

的・予算的)を考慮した上で、活動内容の具体的な検討を行った。

フィールドワークを中心とした内容を計画したが、参加者の異なる興味、多くが初訪問者であることを考慮し、フィリピン社会・文化理解への初歩的導入活動を取り入れる必要性を認めた。そのため、「大学教育の一環として、異文化を知る手段としてのフィールドワークを通じた海外学習機会としてのフィールドスタディー」という基本的構図を認識し、その具体的内容の策定にあたった。その後、原案をもとに、現地大学（フィリピンの歴史・文化・社会についての講義、現地語授業、フィリピン人学生との合同フィールドワーク、学生交流会など）やNGO（ホームステイ）と調整協議を行った。以下、第2回目2013年3月の事前準備訪問の報告書²¹⁾から「総括」の一部を以下に提示する。

[総括]

国際関係学部学生が参加予定のフィリピンでの海外実習の主な狙いは、現場での体験や人々との交流を通じて、主に(1)日比国際・外交関係、(2)海外における日本企業などの経済活動、(3)フィリピンの文化・社会背景などへの理解や関心を深めることである。また、現地での活動にあたる上で、レクチャー（講義学習）、現地訪問（体験学習）、共働作業（フィールドワーク調査・発表）などのバランスを考慮した現地滞在プログラムの計画立案・実施にあたるべきと考える。

今回は主にセブの関係機関との調整や現地視察を行い、上記指針に沿った形での滞在案をある程度の形として考えられる見通しが立った。マニラでの3~4日間、セブでの8~10日間程度の滞在とし、マニラではフィリピン全体について(1)フィリピン大学（フィリピンの背景）、(2)日本大使館（日比関係）、(3)国立博物館・アヤラ博物館（フィリピンの歴史）、(4)NGOコミュニティ訪問（都市部の現状）、(5)日系メディア関係者（日系企業の進出状況）などを中心とし、セブでは(6)サンカルロス大学（セブ背景、学生交流、授業見学、フィールド調査・発表）、(7)NGO（ホームステイ、ローカルコミュニティ訪問）、(8)日系企業訪問、(9)観光関連施設視察（教会、博物館、リゾート施設など）でのゼミ研修を予定。事前研修、現地研修、事後研修という一連の流れの中で、本海外研修の位置づけを確認し、参加学生にとって消化不良にならないように相互の意見交換する機会も適宜設ける。また、有意義な学習機会となるように事前準備・調整を今後行い、

2014年度からのカリキュラム研修科目に備えての試験的ゼミ研修として2013年度9月に実施したい。

上記、2012年11月及び2013年3月実施の2回の現地視察及び関係機関との協議を経て、海外体験学習プログラム内容の企画立案に当たり、2013年9月にゼミ合宿をフィリピンで実施するに至った。

5-2. 現地プログラムの実施及び自己省察

2013年度のゼミ合宿を含む2014年度～2019年度（計6回）の参加者数は実施年度により異なり、4～12名であった。2013年度～2018年度の科目履修は3年次のみを対象であり、本科目履修者数の学科内同学年学生数に占める割合は約5%～10%ということになる。以下、2012年9月～2019年9月のフィリピン訪問プログラム実施経緯を整理し（表4）、フィリピン現地プログラムでの企画立案、実施運営（現地指導を含む）の記録を提示し、各実施回の特徴について整理する²²⁾。

表4. フィリピン訪問実施概要

訪問回数	実施形態	年度	期間（日数）	滞在先	参加者数
1回目 ^{*1}	ゼミ合宿	2013	9/4～9/18(15日)	マニラ、セブ	4(男2、女2)
2回目(1) ^{*2}	多文化FS	2014	9/4～9/18(15日)	マニラ、セブ、 ボホール	5(男2、女3)
3回目(2)	多文化FS	2015	9/3～9/20(18日)	マニラ、セブ	5(女5)
—		2016 ^{*3}	—	—	—
4回目(3)	多文化FS	2017	9/8～9/19(12日)	マニラ、セブ	12(男3、女9)
5回目(4)	多文化FS	2018	9/6～9/18(13日)	マニラ、セブ	7(男1、女6)
6回目(5) ^{*4}	多文化FS	2019	9/6～9/18(13日)	マニラ、セブ	6(男3、女3)

*1 1回目（2013年実施）は「多文化フィールドスタディー」科目としてではなく、3年生ゼミ生希望者による「海外ゼミ合宿」として実施。2014年以降、「多文化

フィールドスタディー（フィリピン）」（通年科目、4単位）の一部として現地訪問プログラムを実施。

*² 「実施回」欄の（ ）内の数字は通年科目（4単位）の一部として実施した回数を示す。

*³ 2016年は履修希望者が1名のため、科目開講中止。

*⁴ 2019年は2018年度からのカリキュラム変更に伴い、2年生からの科目履修が可能となり、2年生男子学生3名、3年生女子学生3名が参加。

(1) 1回目：2013年度「ゼミ合宿」（3・4年生）によるフィリピン訪問

2013年9月に1回目の現地プログラムをゼミ生有志4名（3・4年生）と海外ゼミ合宿として実施した（添付資料A、表8）。初めての学生を引率してのフィリピン訪問ということで、担当者として企画立案時の原案実施の可否、参加学生の現地滞在中の反応、滞在期間・内容の検討、経費管理、健康・安全・危機管理体制を強く意識しながらの現地滞在となった。滞在目的の明確化、現地協力体制の確立、学生役割分担、グループ・ミーティング実施などが効果的であったと認める一方、通年科目の担当に向けた事前・現地・事後指導における課題も確認した。以下、訪問後に提出した報告書²³⁾の「総括」部分を一部抜粋する。

[総括]

今回の平成25年度より実施予定の「多文化フィールドスタディー(フィリピン)」の試験的プログラムとして国際関係学部担当ゼミ生（3・4年生）の希望者4名とともに、マニラ・セブに滞在。関係諸機関（政府関連機関、NGO団体、民間企業、現地大学など）の協力を得て予定したプログラムを実施することができた。

今回の実施にあたり、手探り状態の中で関係機関などとの事前の調整を行い、安全性・費用という観点にも留意し、プログラム実施運営にあたった。限られた時間内で予定していた(1)国際関係への理解(日比関係)、(2)現地体験、(3)青年交流などの目的を、現地訪問、講義・ブリーフィング、実地訪問などのバランスをとりながら、ある程度達成できたと考えている。このようなプログラムは、フィリピン受け入れ関係者の協力が無い限り実施不可能であり、日本側とフィリピン側の双方が共に作り上げていくという意識を共有する機会となったと感じて

いる。

現地プログラム実施中、参加学生が役割分担を行い（リーダー、記録担当、会計担当、撮影担当など）、ほぼ毎日その日の出来事を振り返るミーティングを実施した。同じ体験をしていますが、参加者による感じ方や捉え方の違いを認識し、意見交換をする機会として有意義であった。

今後の実施に向けた課題・留意点を以下に記す。

<プログラム実施前>

- ・訪問先に関する事前知識の獲得（フィリピン文化・歴史、訪問地や訪問先機関の背景情報）
- ・衛生・安全面の自己管理方法の理解（東南アジア圏を想定した自己管理に関する基礎的知識）
- ・英語力・プレゼンテーション力の向上（自己紹介、プレゼンテーション方法などの基礎技術）

<プログラム実施中>

- ・体調管理（気候や食事の違い、現地滞在での疲労などを想定した自己管理方法）
- ・日本への連絡方法（保護者、学校関係者への定期的連絡・安否確認）

<プログラム実施後>

- ・成果報告（現地研修実施後の成果報告、報告書・発表などの機会の設定）

今回参加した学生らの感想を参考にし、実施期間・実施場所・個別プログラム内容・費用について現地受け入れ先機関と調整を行いつつ、次回現地プログラムを計画・実施したい。

(2) 2回目：2014年度「多文化FS」によるフィリピン訪問

2014年9月には「多文化FS（フィリピン）」が初めて開講され、科目の一環として現地訪問プログラムを実施した（添付資料B、表9）。2013年のゼミ合宿に続き、2014年の現地訪問は2回目となった。参加者の一人に中国国籍の学生がいたため、渡航前に査証取得が必要となり、個別に手配を行った。以下、2014年度現地プログラム実施後の報告書²⁴⁾の一部を抜粋する。

[総括]

プログラム全体としては、大きな問題もなく順調に日程を終え、無事に終了することができた。また、限られた時間ではあったが、参加学生たちは「旅行者」「観光者」として現地を訪問しているという意識ではなく、「学習者」という姿勢を持ちながら現地体験を得ることができたようだ。個別の興味を抱く中、現地社会の諸相に触れて感じることは様々であり、頻繁に行われた参加学生たちの意見交換での気づきなども、互いに影響を与えていたように感じられた。また、現地での同世代（提携先の大学生）との合同調査を実施することで、自然と交流が深まり、何気ない会話の中からも現地社会・文化への理解や日本とのつながりを考えるきっかけになったようである。「講義」「訪問」「観察」「体験」「交流」などが日々繰り返される日程の中、怪我・病気・事故もなく現地関係者の協力を得ながら予定のプログラムを実施することができた。以下、今回の実施で浮かび上がった今後の課題点を以下に記載する。

① 査証に関して

フィリピン入国時、日本国籍者の場合は無査証（30日間まで滞在可）、中国籍者は7日間まで無査証だが、それ以上の滞在には観光査証の事前申請が求められていた。フィリピンの査証要件や、事前に査証申請をフィリピン大使館で行う必要があり、査証申請書の他に、身元保証書（預金口座コピー）、在学証明書、フライト予約確認書、現地宿泊予約、滞在日程表などの提出が求められた。国籍により査証取得が求められる場合、時間的余裕を考慮し、手続き手順を明確に指示することが必要である。

② 現地プログラムについて

現地大学生との合同フィールドワークは、参加学生たちから好評であった。また、ホームステイも観光では見ることのできない現地での生活に触れる良い機会であったとの感想が多くあった。今後の実施にあたっては、現地でのプログラム内容・実施日数・経費などを総合的に再検討し、学生が現地での安全を確保するために自己管理を促しつつ、主体的に行動ができる機会の確保を検討していきたい。

③ 参加費用について

今回のプログラム実施中（9月初旬～中旬）に、急激な円安の影響を受けた結果、当初予定していた見積額よりも1～2割の参加費増となった。参加費用については多少の余裕を見ての概算を行ったものの、次回からはさらに余裕を持った参加費概算を示す必要性、また為替レートの急激な変動の影響を受ける可能性についての事前説明を行う必要を認めた。

(3) 3回目：2015年度「多文化FS」によるフィリピン訪問

2015年9月に3回目現地プログラムを実施した（添付資料C、表10）。滞後半に女子学生1名が体調を崩し、デング熱感染が疑われたため、医療機関での検査などの対応を行った結果、疲労による体調不良との診断であった。2015年度の報告書²⁵⁾「総括」部分より一部を抜粋する。

[総括]

本プログラムでの期間中、参加学生たちは無事に現地滞在を終えることができた。また、限られた時間の中で、参加学生たちは多面性を持つフィリピン社会の現実に触れ、「旅行者」「観光者」として現地を訪問しているという意識ではなく、「学習者」としての姿勢を持ち、意味のある現地体験を得ることができた様子であった。様々な場所を訪問し、調査活動を実施や、慣れない食・住環境の中の滞在は体力的にも、心理的にも負担であったようであり、腹痛、食欲不振、発熱などの症状を訴え、活動に参加することができずに休養を強いられる学生もいた。以下、今後の課題について簡略にまとめる。

① 現地プログラムについて

今回で3回目を迎えた現地大学生との合同フィールドワークは、参加学生たちからも大変好評であった。本学学生と実施しているフィールドワーク形式（Student Ambassadorの名称）をモデルとして、サンカルロス大学は海外の他大学からの訪問学生に対して同様の制度を導入し始めたようである。受け入れ先のフィリピン人大学生がこの種のプログラムでの経験を重ねてきたこともあり、安心してセブ市内での行動を任せることができた。また、企業・政府機関・NGO訪問やホームステイでは、観光とは異なる現地生活を垣間見る良い機会となったとの感想が多くあった。今後の実施にあたっては、現地でのプログラム内容・実施日数・経費などを総合的に再検討し、学生が現地での安全を確保するために日程管理を行いつつ、主体的に行動ができる機会のさらなる確保を検討していきたい。

② 参加学生の体調管理について

大学生は学期中にはできない様々な活動を夏季休暇中に予定している。今回のプログラム実施期間のみならず、その他期間における海外渡航や学生活動について、引率者は把握しておく必要性を感じた。個人のプライバシーとの関係もあるが、参加学生の体調管理や滞在中の危機管理について、現地滞在中の予定だけではなく、特に夏季休暇中の参加学生の予定の確認が必要であ

る（特に、睡眠時間や体調など）。

今回、セブでの滞在後、マニラで体調不良を訴えた学生がおり、現地医療機関で診断（血液検査）を受けてデング熱の疑いが指摘されたが、結果は非感染であり問題はなかった。本プログラム参加前に東南アジアを2週間程度旅行し、疲労がたまった状態での参加であったようだ。夏季休暇中の学生の健康状況の把握や参加時の体調管理について把握し、無理のない計画立案・実施運営が必要であることを意識した。

2015年度フィリピン訪問を紹介したエッセイ²⁶⁾には、現地プログラム参加のためのテーマ選定、フィールドワーク、教育的効果とその評価などに関する記載がある。以下、該当部分を抜粋する。

[事前準備について]

前期はフィリピンについての一般的な学習と調査方法についての確認、訪問先大学の学生と動画を通じての事前交流（自己紹介、テーマについての紹介）を出発までの準備とし、「フィリピン社会の実態」「同世代の現地大学生との交流」「日本とフィリピンの関係性」の3点を中心とする現地プログラム実施について、現地関連機関・担当者らと事前連絡・調整を行った。「フィリピンにおける社会開発と変化」という参加者共通のテーマのほか、各自の興味や関心にもとづく個人テーマも設定した。

[フィールドワークについて]

講義終了後には、現地大学生がバディー（案内役）となり、合同フィールドワークを4日間にわたり実施した。また、最終日にはフィールドワーク総括として、「日本・フィリピンの若者文化の紹介」「フィールドワーク結果」についての発表を実施した。両国の若者文化について発表では、互いの文化への興味から若者たちの質疑応答は続いた。その後、グループごとにフィールドワークについて発表を行い、5日間の短期プログラムの総括を行った。通常の授業期間中であるにも関わらず、日本からの学生を積極的に受け入れてくれた現地大学生に感謝したい。お別れ夕食会では、互いに別れを惜しむ様子であったが、今後の若者世代の交流拡大の一つの機会となつてほしいと願っている。

[総括]

今回のフィリピン訪問後、学生たちの感想は「沢山の刺激を得た」「忘れかけていた在学中の目標に再挑戦したいと思った」「私自身の将来を考える上で大きなものとなった」「もっと学ぶことがあると思った」「観光とは違うフィリピンを知れて充実した日々を過ごせた」「五感を使って多くを学ぶことができた」など様々であった。また、過去にフィリピンを何度も訪問していた学生も、「何かを学びにという感覚での訪問はとても新鮮」であり、「2週間は短い、内容がとても濃かった」とのことだった。

慣れない場所で現地の人々と過ごし、体調管理から危機管理まで気を遣い、異なる体験を毎日繰り返すことは、若い学生にとってもかなりの負担であったに違いない。事実、体調不良を訴えたり、医師の診断を受けたりする学生もいた。無事に滞在を終えたことは幸いではあるが、引率教員の立場からは「幕の内弁当」のように詰め込みすぎたのかもしれないという反省が残る。しかし、栄養バランスに関してはできる限り配慮した（つもりである）。

この種のプログラムは大学在学中の各種資格試験や能力試験とは性格が異なるために、その成果を可視化することは難しく、単なる体験で終わる可能性すらある。しかし、異文化に触れ、自らの立ち位置を見出そうとすることで、学生たちは今までとは違って見える周囲の景色にも気づくであろう。「進路を考える上での貴重な経験であった」という学生もいたが、その真価は一人一人が今後どのようにこれらの体験を消化していくかにある。

国際関係学部多文化コミュニケーション学科の学生の多くは、異なる文化や人々への関心を強く持つ若者が多い。今回の限られた条件の中での滞在や（ある程度）用意された体験での気づきを出発点とし、学生たちの「今後の歩み」の中で様々な形での連鎖反応を引き起こしていくことを楽しみにしたい。

(4) 4回目：2017年度「多文化FS」によるフィリピン訪問

2016年度は履修希望者が少数（1名）であったため「多文化FS（フィリピン）」の開講が中止となった。この中止をきっかけに、現地プログラムとカリキュラム趣旨との整合性、訪問先としてのフィリピンの必要性、学年ごとに異なる学生の参加動機・志向性を考慮し、大学・学部・学科における科目の位置付けと内容を再検討する機会ともなった。

翌年度には2017年9月に12名での4回目となる現地訪問をした（添付資料D、表11）。この年よりマニラの大学との協力体制が整い、マニラにおい

でも学生交流、特別授業、民家訪問、博物館・史跡訪問などの幅広い活動が可能となり、充実した現地プログラムの実施運営が行えるようになった。しかし、セブ滞在時に女子学生1名が体調不良によりホームステイ不参加となり、休養を強いられた。参加者個々の健康面の状態の確認を適宜行い、現地活動への参加可否を判断する難しさを感じた。幸い休養後に体調を回復したが、余裕のある日程案作り（企画立案）の必要性を認識した。以下、実施後の報告書²⁷⁾「総括」「今後の方向性・課題」部分より一部を抜粋する。

[総括]

12日間にわたる現地滞在不事を終えることができた。…（中略）… 本プログラムは短期滞在、また語学学習を目的としてはいないが、フィリピンの多言語状況や英語の役割に触れ、多言語状況の中の多言語使用者という自らの姿を想像することで、今後の各自の語学学習の動機付けを促進する効果があったようだ。異文化理解・受容については、現地での経験を各自がそれぞれ限られた理解力の中で消化しようとする努力が、多くの疑問・質問、フィールドワークでのテーマの多様性などに表れており、参加者の主体的取組に対して一定の評価ができる。

また、同世代のフィリピン人学生やホームステイでの受け入れ家族との交流では、参加学生の英語力の高低差や、挨拶程度の現地語知識にもかかわらず、積極的にコミュニケーションをとる姿勢が見られた。特にホームステイでは、厳しい生活環境の一端に触れつつも、参加者それぞれが自己管理を行い、新たな体験に対する戸惑いなどを参加者同士、また引率教員とも分かち合うことができた。互いを受け入れ、認め合う姿勢を持ちながら滞在不を終えた経験は、終了後に作成した学生による報告書内容にも反映されており、学生の自分自身に対する主観的評価ではあるが内面的な成長を得たことがうかがえる。

[今後の方向性・課題]

今回の訪問では、危機管理体制、現地協力体制、教育的効果（教員による企画立案）、参加学生への事前・事後指導、参加費用などについて若干の修正を行いながら企画立案、運営実施にあたった。さらに、過去の課題点を意識しつつ実施運営を担当するなかで、主に2つの事項についてさらなる検討の必要性を確認した。まず(1)「現地協力体制の点検」は、日本からの参加者に対応する現地受入側（学生、スタッフ、ホストファミリーなど）と細部における事前調整である。通常の授業期間中の現地大学生に協力を依頼しているため、試験や授

業の予定があり、こちらの予定した形で現地学生と合同フィールドワークすることが難しい局面が見受けられた。また、(2)「日程作成に関する配慮」では、参加学生の現地環境への適応度を確認しつつ、予定している日程案の変更、または中止も必要であることを痛感した（ホームステイ不参加1名）。特に、例年の5～6名の参加者とは異なり、12名の参加があった今回においては、それぞれの体調管理・危機管理への対応が引率者1名では十分ではないと感じる場面もあり、全体の実施運営及び学生への個別対応を同時に現地で行うには、プログラム日程に時間的余裕を持たせることや、参加者人数への配慮も今後必要になるのではないかと考える。

(5) 5回目：2018年度「多文化FS」によるフィリピン訪問

2018年9月に5回目の現地プログラムを実施した（添付資料E、表12）。2018年度には、通年での科目運営の固定化傾向、現地プログラムの定着化傾向を感じ、単年度ごとの振り返りではなく、現地プログラム初回開始時からの変遷について包括的に振り返る必要性を感じるようになった（図1の各研究領域における考察と包括的理解）。実施後の報告書「総括」「今後の方向性・課題」部分より抜粋し、以下に提示する²⁸⁾。

[総括]

13日間にわたる現地滞在を無事に過ごし、今回は現地解散という形で参加学生をセブから成田へ送り出して現地プログラムの終了となった。滞在中及び滞在後の参加学生の反応からは、「多文化フィールドスタディー（フィリピン）」の実施目的を概ね達成することができたと思われる。本プログラムは短期滞在であるが、参加者の積極的なコミュニケーションへの姿勢が随所に見られた。現地での経験のなかでは、同世代のフィリピン人学生との合同フィールドワーク、ホームステイ経験が印象に残ったようである。参加者がそれぞれの興味を持ち、自己管理を行いつつ、新たな体験に向き合いながら理解を深めようとする姿勢が滞在を通じて見受けられた。滞在を終えた感想に、「5ヵ月間滞在中のアメリカより濃い体験だった」とのある学生の感想があった。学生に何らかの影響を与えていることは間違いないが、その影響が及んでいる領域の丁寧な考察が今後必要である。

[今後の方向性・課題]

今回のフィリピンで現地プログラムの実施は試験的実施の初回を含め5回目を迎え、今回は7名の参加者による実施となった。現在まで、危機管理体制、現地協力体制、教育的効果（教員による企画立案）、参加学生への事前・事後指導、参加費用など、多くの点について試行錯誤を続けながら実施運営にあたってきた経緯がある。過去のフィールドスタディー実施における課題点を意識しつつ現地プログラムの実施運営に当たり、特に、前回の課題として認識された(1)「現地協力体制の点検」、(2)「日程作成に関する配慮」については、今回の訪問に向けて事前調整段階から対応を行った。

(1)「現地協力体制の点検」では、2018年3月の現地訪問時にホームステイ側の団体関係者の聞き取り調査を行い、ホームステイ時の実態把握に努めた。また、受け入れ先大学の担当者とは、実施内容について事前に活動内容についての調整を行った。現地訪問時は現地大学の授業期間であるために、補助学生の予定確認・調整を行い、日本からの参加学生との時間を共有できるように全体のスケジュールを事前に調整し、現地補助学生たちに過剰な負担をかけることを避ける形で実施できたことは一つの成果であると思われる。(2)「日程作成に関する配慮」については、現地での体力的な負担軽減と参加者同士で共有できる時間を比較的多くとるように工夫をしたことで、体調を崩す者も出ずに参加学生同士でのコミュニケーションも活発に行われた。

本科目を担当するにあたり、事前調整、実施運営、事前・事後指導で求められる実務的業務に重点が行われがちになる傾向が否めない。今回現地訪問実施で6年目（実施5回）を迎え、過去の実施例も含めて、本プログラムの軌跡について振り返りを行い、海外体験学習プログラムの複眼的評価に取り組む必要性を感じている。

また、個人ノートには学生の学びに対する観察記録のほか、ミーティング時の発言、担当教員として学生に伝えるべき事柄も記されている。以下の日程最終日の総括ミーティングでの筆者のコメントであるが、現地プログラム内での「出会い」を重視する姿勢を示唆している²⁹⁾。

今回、皆さんは少しの間だけ普段慣れ親しんでいる環境から飛び出して、フィリピンの現実の中に身を置きました。そこから見えてきたもの、感じたこと、考

えたことが鮮明なうちに、フィールドスタディーでの体験について整理してみてください。…（後期初回のレポート提出の指示）… 皆さんと体験を共有すること後期の授業を始めたいと思います。

異なる文化・社会に触れることは楽しいことばかりではありませんが、そこに暮らす人々が必ずいます。誰かの顔が浮かぶことで、その国や文化に対するイメージも大きく左右されます。今回の13日間の滞在ではほんの少しだけフィリピンの文化・社会に触れました。フィリピンのことをふと思い出すときに、誰かの顔が浮かんでくるようなら、皆さんが限られた条件の中でフィリピンを少しでも知ろうとした証拠だと思います。

(6) 6回目：2019年度第6回「多文化FS」によるフィリピン訪問

2019年9月に6回目の現地プログラムを実施した（別添資料Fの表13）。2017年度以降、現地プログラムの基本設計には大きな変更なく実施してきた。新たな課題の認識や細部の変更点はあるものの、現地プログラム実施が順調に行えるようになった。このためか、現地プログラムの教育的効果の検証するためのより広い視点を持つ余裕ができるようになってきた。以下、実施後の報告書³⁰⁾「総括」部分より一部を抜粋する。

[総括]

- (1) 協定校である聖マリア大学を通じてのマニラ滞在は、多々滞在中の便宜を供与してもらった（宿泊、食事、車両、特別講義、市内訪問など）。今回で3回目の実施となり、亜細亜大学側のフィリピン訪問プログラムの趣旨を踏まえ、聖マリア大学からは全体の滞在中を通じての日本からの参加学生の教育的効果を考慮した学生交流、特別授業、マニラ史跡・博物館訪問など細部に至り協力を得て、フィリピンへの導入的プログラムを円滑に運営することができた。
- (2) セブでの滞在中は、特別授業、大学授業見学、フィールドワーク（現地大学生とのペアで実施）を行い、最終日に成果発表会も無事に実施した。現地は学期中であり、フィールドワーク実施において現地補助学生と時間調整の難しさを感じたペアもあったが、概ね実地訪問による観察、インタビュー調査を行い、成果報告会での発表をまとめることができていた。補助学生の予定の事前確認を試みたが、直前まで補助学生が決まらなかった。その背景には、日本の夏季

休暇時期にあたり、他大学からの学生を兼担する補助学生が多く、人員不足があるとの状況が判明した。

- (3) 現地 NGO の協力を得て、参加者ごとに異なるホストファミリーによるホームステイを実施し、無事終了することができた。「今回のフィリピン滞在中で、一番心に残った」などの感想があり、ホームステイ終了時には涙する学生もいた。課題として、参加学生に対する一定の感情的影響力を持つホームステイ経験を、担当者としてどのように事後指導の中に取り入れていくのか（いくべきか）という課題を強く意識した。今回の参加学生は各自の体験をそれぞれが消化していこうとする様子が、滞在中のミーティングなどを通じて見受けられたが、このような体験が印象的（感情的）であればあるほど、学生にとって大きな「肯定的影響」「否定的影響」を与える可能性があることを感じ、現地での学習経験の質と量のバランスと指導内容を考慮する必要性を認識した。
 - (4) …（省略）… 今回の総括では、それぞれ感想を共有し、認識のずれや考え方の違いなどに対する意見が積極的に出されていた。同行教員が適宜助言や説明などを適切に行うことは重要であるが、教員からの一方通行の説明に留まらないように留意し、学生の「自発的な気づき」を促す指導の大切さを認識した。
-

6. フィリピン現地プログラムの変遷とその特徴

6-1. 「多文化 FS（フィリピン）」の視察訪問段階の特徴

現地プログラム初回実施前の視察段階では、国際関係学を専攻する学生の参加を念頭に置き、フィリピン短期滞在中でのフィールドワークを通じた教育プログラムの具体的な構築に取り組んだ。訪問の目的、さらに旅行会社や NGO が企画する多くのスタディツアーなどとの違いを意識して、大学教育における海外体験学習の意義に向き合った。初回の現地視察後（2013年3月）に「日比国際・外交関係」「海外における日本企業などの経済活動」「フィリピンの文化・社会背景などへの理解や関心を深める」ことを目的として設定したが、1回目（2013年9月）の初回訪問時には「国際関係への理解（日比関係）」「現地体験」「青年交流」とした。2015年度以降には、より具体的に「フィリピン社会の実態理解」「同世代の現地大学生との交流」「日

本とフィリピンの関係性の理解」を目的とした。この変更の背景には、学科カリキュラム内の海外インターンシップ関連科目配置やフィールドスタディーの目的の明確化、短期滞在での教育的効果の優先順位を考慮した状況があった。

また、フィリピン社会の理解には欠かせない「多様性（地域差、社会階層差）」に触れる機会の確保への配慮を行った。結果として、首都マニラと地方都市セブの2地域への訪問や住民生活の体験機会（都市部貧困層）を組み入れる内容とした。現地の大学やNGOから協力を得て、大学では特別授業（フィリピン文化・社会・歴史、日比関係、現地語など）、同世代の大学生との合同フィールドワーク、NGOでのホームステイを中心とする現地プログラムとする見通しが立った。さらに、日比関係の理解を促す機会として、日本政府関連組織・日系企業への訪問も取り入れる方向で調整を進めた。企画立案段階では、効率的かつ効果的な実施運営という意識が強く、「効率的」とは短期間にできる限り多種多様な体験機会を設け、「効果的」とはできるだけ多くの体験に触れることで学生の学びが促進されると考えた。

6-2. 現地プログラムの変遷

2019年度フィリピン訪問までに、現地プログラムがある程度定着化しているが、それまでの変遷は2016年度の実施中止を境目とした2つの期間（I期＝2013年～2015年、II期＝2017年～2019年）に大別することができる。実施回により活動内容に多少の違いはあるものの、I期、II期ともに「滞在目的」「滞在期間（2週間程度）」「滞在場所（マニラ及びセブ）」「参加費用（15万円程度、フライト・現地移動の交通費、宿泊費、現地活動費、食費、雑費を含む）」「大学、NGO（セブでのフィールドワーク及びホームステイ）」については現在まで共通している。

I期とII期における主な変更点は、①訪問先及び訪問順の固定化、②マニラの協力大学の追加、③大学での現地語授業の中止、④ホームステイの延泊、⑤日本政府関連機関・日系企業・NGO訪問の中止、⑥リゾート施設で

の宿泊がある（表5）。

表5. 現地プログラムの変更点

項目	I期（2013年度～2015年度）	II期（2017年度～2019年度）
目的	(1) フィリピン社会の実態理解 (2) 同世代の現地大学生との交流 (3) 日本とフィリピンの関係性の理解	
訪問順	2013年度 マニラ→セブ 2014年度 セブ(ボホール)→マニラ 2015年度 セブ→マニラ	2017年度 マニラ→セブ 2018年度 マニラ→セブ 2019年度 マニラ→セブ(→マニラ乗継)
協力先大学		(マニラ) 聖マリア大学ケソン校 ・学生交流会 ・講義（フィリピン概況） ・史跡・博物館訪問、市内視察
	(セブ) サンカルロス大学 ・特別講義（歴史、日比関係、現地語） ・大学授業見学 ・合同フィールドワーク	(セブ) サンカルロス大学 ・特別講義（歴史、日比関係） ・大学授業見学 ・合同フィールドワーク
協力先 NGO	ホームステイ（1泊2日）	ホームステイ（2泊3日）
訪問先	日本政府関連機関・日系企業・ NGO・史跡訪問 (英語学校* ¹)	史跡訪問 (英語学校* ¹)
リポート施設	半日訪問	1泊

注：*¹ 英語学校訪問は、2015年マニラで3日間授業に参加。2017年はマニラで模擬授業1時間に参加。2019年はセブで1日授業に参加。いずれもマンツーマンレッスンを含む英語授業を体験した。

以下、上記①～⑥の6項目における変更理由を、以下に簡略に記載する。

① 訪問先及び訪問順の固定化

I期では訪問先（マニラ、セブ、ボホール）や訪問順序が諸事情（航空運賃、現地祝日、受け入れ先事情など）により順不同であったが、学生がフィリピンでの体験を消化していく際に、自分自身と現地体験との関連付けがうまくいかない状況が散見された。現地プログラムの中心となるセブでの現地生活に近い体験の数々が濃密であるのに対し、首都マニ

ラでの滞在は大都市商業圏の一般的体験になる傾向も認められた。ほとんどの学生が初めて訪問するフィリピンに対する興味を深め、不慣れな環境での滞在中に文化的・社会的理解を深め、各々の興味にもとづいてフィールドワークに取り組むまでに導くためには、段階的な仕組み作りの必要性を認めた。

② マニラの協力大学の追加

マニラの大学との協力関係を築くことができ、2017年度の現地プログラムからは、全体のプログラムの導入部としてマニラ滞在中に位置付け、大学講義、博物館、市内視察などを通じてのフィリピン文化・社会・歴史に対する基礎的理解を促進する活動を組み入れた。

③ 大学での現地語授業の中止

挨拶などの基礎的な現地語の知識の必要性は認めていたため、大学で初歩的表現についての現地語（セブアノ語）学習機会の提供を依頼していた。しかし、フィリピン政府の政策により語学習得を目的とする外国人訪問者に対して「特別就学許可証」（通称 SSP、Special Study Permit、6か月有効、申請費用 1.3 万円程度）の取得を義務付けていることから、同様の方針が大学での現地語授業にも適用されるとの説明があった。数日間の現地語授業に高額な許可証取得費用の支払いが発生する状況となり、費用対効果の観点からこの費用負担は適切ではないとの判断に至り現地語授業の提供依頼を取りやめた。

④ ホームステイの延泊

NGO 協力を得て、初回実施時より都市部低所得者層家庭でのホームステイを組み入れたが、参加学生の現地生活環境への適応度の不安から 1 泊での実施としていた。しかし、2017年3月にホームステイ先家族を対象とした聞き取り調査時に、延泊と実施時期の調整（週末実施）依頼があり、また、過去の参加学生からも延泊希望の感想が多かったことから、2017年度以降は 2 泊 3 日で実施することとした。

⑤ 日本政府関連機関・日系企業・NGO 訪問の中止

I期には日比関係の理解を目的として、フィリピンに関わる日本人や日系公的・民間機関への訪問を組み入れたが、日程調整の難しさ、訪問先の特特殊性（特定分野、特定目的など）があり、教育的体験の一連の文脈の中にこれらの訪問機会を適切に位置付けることが難しいと感じられた。これらの機関への訪問は明確な目的や関心を持った学生を対象に実施すべきであると考え、「多文化FS」科目内に無理に組み入れることは適切ではないとの判断に至った。

⑥ リゾート施設での宿泊

日本では、南国の島というイメージを伴って認識されているフィリピンであり、観光は日本とフィリピンを結びつけている産業形態の一つである。特に、セブでは観光的側面の一端にも触れる機会を設定することが企画立案段階にはあったが、滞在目的が観光ではないため半日での訪問としていた。しかし、現地プログラム終了時の総括を行うための時間的余裕と環境の確保の必要性を認めたことから、宿泊形態とした。

6-3. 現地プログラムの主な特徴

I期の現地プログラムの特徴は、訪問側、受け入れ側ともに立ち上げ段階であったことから、いずれの活動も試験的实施という位置づけであった。そのため、企画立案時の現地活動予定を滞りなく行い、滞在を無事に終えることに第一の関心を寄せ、現地プログラム実施に関する留意事項や課題の洗い出しを行ってきた。プログラム実施目的に連動する諸活動の全体的なバランスに配慮しつつも、「健康・安全・危機管理」「多種多様な体験機会の配置」「フィールドワークの方法」「費用対効果」への意識が強く、限られた滞在条件、短期間での濃密で雑多な体験機会をできる限り組み入れ、予定調和的にプログラムを実施運営する傾向が見られた。しかし、担当を重ねていくなかで学生の反応から、大学の教育活動としての現地プログラムの意義、役割を意識し始め、学習意欲や目的意識を促進するための現地体験の統一性や関連性の役割に着目するようになった。結果として、学生の効果的な学習を促

すための体験の質を確保した「学びの仕掛け」の必要性を認識することとなった。また、この質を高めるには、受け入れ側への過剰負担・悪影響に配慮した詳細な調整が必要であるとも感じた。

Ⅱ期では、「滞在目的の明確化（＝活動内容のスリム化、焦点化）」「フィールドワークを中心とする体験学習機会と一連の体験の関連性の整理」「時間的余裕の確保」を意識した結果、現地プログラムの固定化と統一性を図った。Ⅱ期の現地プログラムでは以下の4段階（導入部→地域社会理解→住民社会理解→観光的側面）の活動を中心にした企画立案の再検討し、現地との調整作業を経て実施運営に当たった（表6）。

表6. 現地プログラムの全体の流れ

段階 項目	導入部 (マニラ)	地域社会理解 (セブ)	住民社会理解 (セブ)	観光的側面 (セブ)
フィールド の3つの層	国民国家 国家周辺世界	包括的地域社会	村落共同体	国家周辺世界
目的	フィリピン社会の実態 同世代との交流	フィリピン社会の実態 同世代との交流	フィリピン社会の実態	日比関係
協力機関	大学	大学	NGO	(民間機関)
活動内容	学生交流、大学講義、 史跡・博物館訪問、 市内視察	大学講義、授業見学、 合同フィールドワーク	ホームステイ	リゾート施設 * 英語学校

Ⅱ期の主な特徴は、「フィールドの3つの層」を意識した訪問先及び訪問順の固定化と各訪問先での活動目的の明確化、内容のスリム化である。「フィールドの3つの層」とは、調査対象とする場所の全体を構成する「国民国家とそれを超える領域」「小さな共同体を包摂する広域な地域社会」「小さな共同体（村落共同体、親族共同体など）」のことである³¹⁾。学生のフィリピンに対する興味を喚起し、各自の興味にもとづいた現地調査へ結びつけるために、学習者の視点から現地での体験と活動内容との関連付けを意識し

たプログラム構成とした。滞在を重ねるごとに、学生の意識を徐々に集団活動から個人活動へ移行させ、現地での体験をフィリピンという国（首都）から地域社会（セブ）、そして住民共同体（セブの住民生活）へと掘り下げていくような感覚を抱かせるように段階的な「学びの仕掛け」の構図を設けた。

滞在中にも日比関係の一端に触れる機会を設けるが、滞在終了時には日比関係のつながりの一つである観光的側面（リゾート施設での宿泊）を組み込み、「日本（出国）→フィリピン（国家）→地域社会（地域）→村落共同体（住民共同体）→観光的側面（日比関係）→日本（帰国）」という一連の体験の流れ感じることができるよう整理を行った。特に、フィリピン滞在中に設定した都市低所得者層家庭でのホームステイ後のリゾート施設での宿泊体験は、フィリピン社会の格差をより強く意識するなかで「全滞在中の総括」「他者の学びを共有」する機会となっている。

7. おわりに：大学教育におけるフィールドワークとは

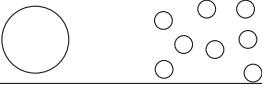

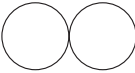
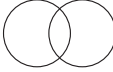
「フィールドスタディー」と「フィールドワーク」の違いを意識するようになった。「スタディー」と「ワーク」には違いが存在する。その違いは、文字通りの解釈からは「スタディー」は「学生の学び」に焦点が起かれているのに対して、「ワーク」はある特定の目的を達成するための「仕事」ということになる。現在、多くの大学でもフィールドスタディーという科目が開講されており、内容も多様である。このフィールドスタディーは、団体旅行として実施する「フィールドワークの大学教育プログラムあるいは実践教育プログラム（フィールドワークの大衆化した教育的実践）」と便宜的に定義づけられ、「感動が求められているがゆえに感動が保障されており、その一方で必ず不完全感を残し、それゆえに動機付けが残るというメカニズムが組み込まれている手法」という特徴を持つ³²⁾。感動を伴う学びの経験を与えることがフィールドスタディーに構造的に求められているのである。この教

育的意義や役割に照らしてみると、フィールドスタディーの企画立案、実施運営担当者という立場からは、高度に専門化された学術的フィールドワーク経験とは異なるフィールドワークの大衆化した教育的実践をどのようにして具体化、現実化するのかという課題に直面する。

フィールドワークの定義や方法論については数多くの文献が存在するので、詳細はここで扱わないが、科目担当をする上での筆者のフィールドワーク教育に対する認識を整理したい。まず、「多文化FS（フィリピン）」では、フィリピン社会の一端に触れることで生じる個人的興味にもとづいて学ぶことに主眼を置いているため、現地訪問前に個別具体的な研究テーマを設定する専門教育としてのフィールドワークとは性格が異なる。フィールドワークの学術的定義は「異文化理解の方法であり、これによって、生活する人々の世界に入り、そこで、人々の文化を学習しながら、それらの他者を理解していく過程³³⁾」である。しかし、筆者は担当科目内でのフィールドワークを「学生が独自の課題を見つけ、現地の人々の協力しながら、自分の理解を深めていく方法」として捉えている。いわば、フィールドワークは学び方を学ぶための教育的役割を担っている。

さらに、大学でのフィールドワーク教育は専門課程と初期導入教育段階での教育的意味を考える必要があり、基礎教育（初期導入教育）の目的は「フィールドワークという経験を通じて、人と人との関わり方の技法を学び、他者理解と自己理解の相互の関係の中で両者についての認識を深めることや、現場の声を聴くことの大切さを学ぶこと³⁴⁾」にある。フィールドワークの手法はいくつもあるが、この目的達成のために、筆者は好んで現地プログラムの随所に「人と出会う機会」をできるだけ多く設け、自然とインタビュー（対面式調査）を行う環境を作り出すことに留意している。以下、フィールドワークの方法論と対人関係の接触レベルを関連付けて分析したモデルを参考にして、フィリピンでの現地プログラムの特徴を明らかにする³⁵⁾（表7）。

表 7. 対人関係モデルと調査の種類

レベル	モデル	調査の種類
レベル 0		Web 上のアンケート
レベル 1		調査票中心主義の郵送調査 調査票中心主義の留め置き調査
レベル 2		調査票中心主義の面接調査
レベル 3		対面式面接調査フィールドワーク

(宮内、2005 年、68 ページより引用)

このモデルは対人関係とフィールドワーク手法との関連を整理するために作成されたもの(レベル 3 が最も濃密な対人関係)であるが、筆者がフィールドワークに対して抱く認識、そしてその教育的実践の捉え方を整理するために有益であると考え。現地プログラムへ意識的に取り入れようしていることは、表 7 のレベル 3 (濃密な接触)に当たる「人との出会い」である。海外フィールドワーク実施上の各種制限要因(時間、費用、初訪問、言語能力、安全・危機管理上の行動制限など)のなかで、効率的に調査を行う方法としては難易度が高いともいえる。しかし、敢えて諸事情を考慮した方法上の合理的妥協点を着地点とせず、濃密な対人関係が求められる面接手法にこだわるのは、フィールドワークの基本的技術は「ことばを通じた面接」と「フィールドでの観察」であるとの認識があるからである。当然、この種の手法を不得意とする学生も存在し、調査目的を達成することができずに失敗に終わる可能性もある。フィールドワーク教育(フィールドワークの大衆化した教育実践)の文脈でのフィールドワークは、単なる調査手法の習得を目的とするのではなく、何について調べるべきかの問いを見出すことを目的とし、「生きかた」としてのフィールドワークの中にある新しい知に触れる可

能性を求めることにあると考える。その目的のために、フィールドを体験する初心者に対して様々な補助的な工夫が施された仕掛けがあり、人との関わり（同世代大学生、学校関係者、NGO関係者、近隣住民など）を段階的に深めていくことへの配慮が行われている。

この配慮の一例として、セブでは現地大学生とペアとなり、フィールドワークの実施が挙げられる。この現地大学生は調査補助という役割を担い、興味を共有する同世代の対話者として、質問を一緒に考え共同調査者、訪問先の選定者・案内人、現地調査時の補助者・通訳者ともなり、成果発表のための助言者にもなる。インフォーマントの活用という学術的手法の入門編を意識して、取り入れた手法である。また、滞在中のフィールドでの「ワーク」ではなく、「スタディー」の側面に重きを置く活動においても、できるだけ「出会い」の機会を設ける仕掛け作りを強く意識している。現地滞在中、様々な人と出会い、その人々の生活に触れ、人々が暮らす社会を知り、文化を知る手がかりとし、自分の興味や理解を深めていく学び方を体験させるといった教員としての教育的意図が根底にある。

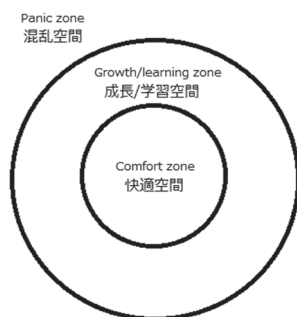
本稿では、「多文化FS（フィリピン）」のフィールドワークを中心とする現地プログラムの企画立案、実施運営の担当経験について自己省察を行い、その変遷と特徴を明らかにした。現地プログラムに関する担当教員からの主観的見解のみを分析対象としたため、一部分の評価でしかない。「だれが」「何を」「いつ」「どのような方法で」「何を基準に」評価するのかという観点からは複数の評価方法が可能となるため、フィリピンでの海外体験学習科目の実態をより深いレベルで把握し、その質の向上を目指すためには、複眼的視点から包括的評価が行われるべきである。教育プログラムとしての評価は、①担当教員による評価、②参加学生による評価、③受け入れ側による評価、④同僚や第三者（部外者）による複眼的視点が必要になるであろう。また、科目としての評価は、通年を通じての包括的視点から行われるべきであろう。

現地プログラムの企画立案、実施運営の経験を重なるごとに、担当教員と

しての視野の広がりを感じ、学生の経験を通じた学びについての様々な気づきも得てきた。特に、今後の課題としては、現地の人々との出会いを通じた学生の「感情の揺れを伴う現地体験」をどのように大学教育の文脈へ適切に位置づけるのかを意識し、体験学習（経験学習）のメカニズム、フィールドワークの教育方法、フィールドワークにおける感情などに対する理解を深めていく必要性を感じている。現地プログラムを固定化し、安定的に実施を継続しても、毎回異なる参加学生の個人的背景により、興味を持つこと、感じること、学ぶことは多様となる。この点では、個人の限定的な経験のみに頼らず、他大学で実施する同様のプログラムにおける多種多様な「学びの仕掛け作り」を参考としていきたい。

最後に、野外教育分野の「快適空間モデル（Comfort zone model）³⁶⁾」を提示したい（図2）。

図2. 快適空間モデル（Comfort zone model）



（Brown、2008年、3ページより引用）

このモデルには「快適空間（Comfort zone）」「成長/学習空間（Growth/learning zone）」「混乱空間（Panic zone）」から構成され、「人がストレスや困難を感じる状況に陥るとき、その状況に反応し立ち上がり、躊躇や恐れを乗り越えて、人として成長するという信念に基づいている³⁷⁾。」海外体験学習

においても、このモデルの示す「快適空間」と「混乱空間」の間に存在する「成長/学習空間」を見出すことは重要である。担当教員はストレスや困難を感じる状況を意図的に作り出し、快適な環境から学生が出ることを促しながらも、混乱状態に陥らないように注意を怠ってはいけない。主体的な学びを促す空間へ学生を導くことで、学習効果の向上を狙うのである。

この仕掛けの構築には、現地の受け入れ側からの協力を欠くことはできず、受け入れ側と共働して学びの空間を作り出すこと、そして、この意図的に整えられた仕掛けのなかでの偶然の出会いを促し、学生が新たな知への可能性を切り開いていくことを期待する。新たな知への可能性を見据えた現地プログラムの質の向上のためには、担当教員がその企画立案、実施運営経験を積み重ねていくなかで、学習者（体験学習）の把握、フィールドワーク教育への理解に努め、学生とともに「偶然の出会い」を「必然の学び」に変えていく試みに挑戦し続けていく以外に方法はないと思われる。

注

- 1) 大学での「体験学習」（地域連携、フィールドワーク実施など）の取り組みを紹介する事例報告として、愛媛大学の法文学部における取組を紹介している『地域と連携する大学教育』2016年、北九州市立大学のフィールドワーク事例を含む『野研！大学が野に出たーフィールドワーク教育と大學堂ー』2017年などは、大学での「キャンパス外との連携」「フィールドワーク教育」のあり方を考える上で実践例に基づいた示唆が多く含まれている。また、大学で学科正規主軸科目としての海外フィールドワーク科目を紹介している清泉女子大学文学部地球市民学科（2014）『清泉女子大学地球市民学科の挑戦～21世紀の学びをフィールドワークに求めて』にはフィリピンでのフィールドワーク事例が含まれ、担当者の取り組み事例が紹介されている。
- 2) 子島・藤原（2017）、「海外体験学習の多様性」4ページを参照。フィールドスタディの現状について、いくつもの大学が、10日前後のグループ活動を中心とするアジアを中心に世界各地を訪れる複数のプログラムを実行しており、現地滞在日数は短くとも、参加者にとって濃密な体験を提供するプログラムであり、日本全体では毎年何千人もの学生が参加しているだろうとの見解が示されている。

- 3) 大橋・敦賀・本庄・安藤・片山、2016年、74ページ参照。ここでは、2008年の中央教育審議会の提言や「海外体験学習」研究会の原則を踏まえて、「海外体験学習」の定義を示している。
- 4) 山西 (2009)、16～22ページ「2. ファシリテーターを超える」を参照。試論として、課題を探究することを目的とする開発教育の教師・指導者に求められる多様な役割が整理されているが、教師・指導者が個人としてすべての役割を担うことは想定されておらず、「個人では、対話者としてのあり様を基礎としながらも、それぞれの置かれた状況から、プロデューサーの役割を軸に、ファシリテーター、コーディネーターのそれぞれの役割を、可能な範囲で担っていくことが考えられ、団体や地域では、協働・協力の中でそれぞれの役割を分担し合うことが想定できる」(22ページ)との見解が示されている。
- 5) 藤原 (2014) 39ページ掲載の研究枠組みの概念図を参照。この研究の共同研究者の背景として、多くがJICA教師海外研修の参加者であり、分析事例の対象としても教員を対象とした海外研修が含まれている。4つの研究アプローチのうち(D)授業づくり、実践・学びあいについては、教員参加の海外研修の成果として、研修先の政府開発援助や青年海外協力隊の活動地域を訪問し、研修成果を帰国後の授業づくりに生かすという目的があるため、分析の枠組みの中の一つのアプローチとして挙げられている。一般的には、「研修成果」と言い換えることができ、本稿の大学生を対象とした海外体験学習との関連では、可視化できる「研修成果」として「発表・報告書作成」を位置づけることができると考える。詳細の説明については、藤原 (2014) の36～41ページを参照のこと。
- 6) 大学の教育目標については『亜細亜大学 大学案内2020 “Asia University Guide Book 2020”』14ページ、学部・学科の教育方針については『平成30年度履修の手引き 国際関係学部』内の「教育の目的 多文化コミュニケーション学科」15ページから作成。
- 7) 井本 (2013)、104ページを参照。
- 8) エリス&ボクナー、(2003)、「自己エスノグラフィーとは何か」135～137ページを参照。
- 9) 濱名 (2018)、102ページを参照。
- 10) 井本 (2015)、109～110ページを参照。
- 11) 亜細亜大学ホームページ内掲載「3つのポリシー」の「教育課程の編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)」を参照 (<https://www.asia-u.ac.jp/about/policy/#anchor2>)。
- 12) 亜細亜大学ホームページ内掲載「行動力あるグローバル人材の育成」を参照 (<https://www.asia-u.ac.jp/asiaglobal/>)。
- 13) 亜細亜大学シラバス (<https://www.asia-u.ac.jp/academics/syllabus/>) に掲載。

- 14) 白井 (2003) 「プロローグ 問題解決のための言語学」i~v ページ参照。
- 15) 佐野 (2015)、2~35 ページ参照。
- 16) 佐藤 (2006)、70 ページ参照。「恥知らずの折衷主義」はフィールドワークの方法面での背中主義や無節操さを貶めているわけではなく、フィールドワーク特有の全体論的な方向、生身の人間の行動や文化や社会の成り立ちに必然的に含まれる矛盾や非一貫性を、ありのまますべて受け入れようとするフィールドワーカーの基本的姿勢を肯定的に捉える言葉であると説明されている。
- 17) 小張 (2018)、「多言語状況の体験 - ミンダナオ島のフィールドワークから -」206~219 ページ参照。筆者が実施したフィリピンでのフィールドワークを事例に取り上げ、海外での調査活動を実施する際に誰しもが必ず向き合わなくてはならないフィールドでの気づき、判断、選択、行動という一連の経験について紹介している。
- 18) 松田 (2011)、94~96 ページ参照。海外でフィールドワークをおこなう際の考え方として、以前人類学者のなかにも「言語を習得すれば異文化理解の大部分は達成できる」という言語万能主義があったとし、「調査の核心は言語であり、フィールドワーカーはフィールドで話される言語をまず徹底的に習得し自在に操れるようになってこそ、一人前の調査者になれる」という考え方を指摘している。「言語はあくまでも表面的には語彙を連ねて意味を明示するための媒体であり、人々の行為を支えそれを統制する潜在的な規則を示しているわけでも、人々の思惑や感情の表現の母体となっているわけでもない」との見解を示しているが、筆者の専門分野は(社会)言語学であり、海外でのフィールドワーク調査には対象とする社会の言語に焦点を当てるため、言語理解は欠くことができないとの考え方を持つ傾向があることを自覚している。
- 19) 4月23日~30日で実施(4月28日~29日は山形滞在)。査証用招聘状作成や宿泊手配などを担当。1週間程度の東京滞在では亜細亜大学が受け入れ校となり、その後山形大学を訪問。亜細亜大学では、2014年度「多文化FS(フィリピン)」参加の卒業生や2015年度参加の現役生(訪問時4年生)、国際交流部職員、英語センター教員などの協力を得て、大学での講義や東京ミニフィールドワーク(吉祥寺、新宿、渋谷など)を実施。現在まで1回のみの実施であるが、日本からフィリピンへの一方通行の交流のみではなく、将来的な双方向交流の可能性を示すフィリピンからの日本訪問であった。
- 20) 2012年11月14日に国際交流課職員及び筆者により作成、亜細亜大学国際交流課に提出された「平成24年度グローバル人材育成推進事業海外出張報告書(10月30日~11月4日)」より一部を抜粋。
- 21) 2013年3月25日に筆者により作成、亜細亜大学国際交流課に提出された「平成24年度グローバル人材育成推進事業海外出張報告書(3月18日~25日)」

- よりより一部を抜粋。
- 22) 各種資料として参考にする抜粋引用箇所の表記について、本稿全体を通じた文体に合うように、作成時の文意を損なわない範囲で記載番号表記や若干の表現修正を行った。
 - 23) 2014年3月2日に筆者により作成、亜細亜大学国際交流課に提出された「文部科学省グローバル人材育成推進事業平成25年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 24) 2015年1月30日に筆者により作成、亜細亜大学国際交流課に提出された「文部科学省経済社会の発展の牽引するグローバル人材育成支援平成26年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 25) 2016年6月3日に筆者により作成、亜細亜大学国際交流課に提出された「文部科学省経済社会の発展の牽引するグローバル人材育成支援平成27年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 26) 小張(2016)、「2015年夏季フィリピンフィールドワーク」32～41ページを参照。
 - 27) 2018年5月21日に筆者により作成、亜細亜大学教学課に提出された「平成29年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 28) 2018年9月25日に筆者により作成、亜細亜大学教学課に提出された「平成30年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 29) 「2018年度多文化FS個人ノート」より引用。
 - 30) 2019年10月3日に筆者により作成、亜細亜大学教学課に提出された「令和元年度海外出張報告書」より抜粋。
 - 31) 松田(2011)、「展開—フィールドの3つの層」99～101ページを参照。
 - 32) 小長谷(2007)、403ページ及び408ページを参照。NGOでのフィールドスタディを事例にし、フィールドスタディの参加者のレポートをもとに感動を生み出す仕組みを指摘し、商品化されているフィールドスタディの特徴から、フィールドワークとは何かを描こうとしている。引用元では「スタディ」と表記されているが、本稿では亜細亜大学での科目名称に準拠し「スタディー」として表記した。
 - 33) 原尻(2006)、57ページを参照。
 - 34) 同上、58ページを参照。文化人類学に対する体系的知識と考え方の修得を前提とした学部専門課程と基礎教育・初期導入教育でのフィールドワークの教育目的は異なり、それぞれの意義をについて日本の今日的な教育体制の現状を背景に記している。
 - 35) 宮内(2005)は第3章「フィールドでの恋愛」のなかで、レヴィンジャーとスヌークの「対人関係のモデル」を援用し、フィールドワークにおける対人関係モデルと調査の種類を整理し、フィールドワークで生じうる調査者と対象者との恋愛関係について分析を試みている。フィールドでの生じる感情に

ついて認め、感情によるデータの誤読の可能性を示唆している。

- 36) Brown (2008), p.3 掲載の Panicucci (2007) を援用したモデルより引用。
- 37) Brown (2008) から筆者訳として引用。原文(英語)は次の通り。“It is based on the belief that when placed in a stressful or challenging situation people will respond, rise to the occasion and overcome their hesitancy or fear and grow as individuals.” (p.3)

参考文献

- 亜細亜大学 (2019) 『亜細亜大学 大学案内 2020』亜細亜大学
- 亜細亜大学 (2019) 『平成 30 年度履修の手引き 国際関係学部』亜細亜大学
- 亜細亜大学 HP (2016) 「行動力あるグローバル人材の育成」(2016 年 12 月 23 日更新) (<https://www.asia-u.ac.jp/asiaglobal/>) 2019 年 10 月 3 日閲覧。
- 亜細亜大学 HP (2019) 「3 つのポリシー 教育課程の編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)」(2019 年 4 月 4 日更新) (<https://www.asia-u.ac.jp/about/policy/#anchor2>) 2019 年 10 月 3 日閲覧。
- 井本由紀 (2013) 「オートエスノグラフィー」藤田結子・北村文(編)『現代エスノグラフィー:新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社、104~111 ページ
- エリス、キャロリン & ボクナー、アーサー (2006) 「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性:研究対象としての研究者」(第 5 章)平山満義(監訳)大谷尚・伊藤勇(訳)N. K. デンジン Y. S. リンカン編『質的研究ハンドブック 3 巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房、129~164 ページ
- 大橋一友・敦賀和外・本庄かおり・安藤由香里・片山歩 (2016) 「海外体験型教育プログラムのつくり方:大阪大学グローバルコラボレーションセンターの経験から」『大阪大学高等教育研究』第 4 号、大阪大学全学教育推進機構、73~86 ページ
- 大西正志・竹内康弘・佐藤亮子・山口信夫・米田誠司・宇都宮千穂(編) (2016) 『地域と連携する大学教育の挑戦 愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースの軌跡』ペリかん社
- 小長谷有紀 (2007) 「NGO によるフィールドスタディの現場から - 大衆化するフィールドワーク」『文化人類学』第 72 巻 3 号、日本文化人類学会、403~411 ページ
- 小張順弘 (2014) 「文部科学省グローバル人材育成推進事業平成 25 年度海外出張報告書」亜細亜大学
- 小張順弘 (2015) 「文部科学省経済社会の発展の牽引するグローバル人材育成支援

- 平成 26 年度海外出張報告書」亜細亜大学
- 小張順弘 (2014) 「文部科学省グローバル人材育成推進事業平成 25 年度海外出張報告書」亜細亜大学
- 小張順弘 (2014) 「文部科学省グローバル人材育成推進事業平成 25 年度海外出張報告書」亜細亜大学
- 小張順弘 (2016) 「2015 年夏季フィリピンフィールドワーク」『樞 国際関係・多文化フォトジャーナル』Vol.3 亜細亜大学国際関係学部、32～41 ページ
- 小張順弘 (2017) 「多言語状況の体験—ミンダナオ島のフィールドワークから—」高山陽子 (編) 『多文化時代の観光学』ミネルヴァ書房、206～219 ページ
- 佐藤郁哉 (2008) 『フィールドワーク増訂版 書を持って街へでよう』新曜社
- 佐野直子 (2015) 『社会言語学のまなざし』三元社
- 白井恭弘 (2013) 『ことばの力学—応用言語学への招待』岩波新書
- 清泉女子大学文学部地球市民学科 (編) (2014) 『清泉女子大学地球市民学科の挑戦—21 世紀の学びをフィールドワークに求めて』高文研
- 竹川大介 (2017) 『野研! 大学が野に出た—フィールドワーク教育と大學堂—(シリーズ北九大の挑戦 4)』九州大学出版会
- 原尻英樹 (2006) 『フィールドワーク教育入門—コミュニケーション力の育成』玉川大学出版部
- 子島進・藤原孝章 (2017) 「大学における海外体験学習」子島進・藤原孝章 (編) 『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、1～19 ページ
- 濱名潔 (2018) 「保育研究における自己エスノグラフィーの可能性と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部 第 67 号、99～108 ページ
- 松田素二 (2011) 「海外フィールドワーク」日本文化人類学会 (監修) 鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工 (編) 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社、87～103 ページ
- 宮内洋 (2005) 『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房
- Brown, Mike (2008) “Comfort Zone: Model or metaphor?” *Australian Journal of Outdoor Education*, 12 (1), pp.3-12. Melbourne : Australian Outdoor Education Council.
- Panicucci, J. (2007) “Cornerstones of adventure education.” In D. Prouty, J. Panicucci & R. Collinson (Eds.), *Adventure education: Theory and applications*, pp. 33-48. Champaign, IL: Human Kinetics.

添付資料 A

2013 年度ゼミ合宿 (3・4 年生)

実施日: 2013 年 9 月 4 日~9 月 18 日 (15 日間)

参加者: 4 名 (男子 2 名 = 3 年生 1 名、4 年生 1 名、女子 2 名 = 3 年生 2 名)

表 8. 2013 年度ゼミ合宿 (3・4 年生) 現地プログラム実施日程表

日数	日程	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9月4日(水)	出国 成田→マニラ (JAL ^{*2})	マニラ
2	9月5日(木)	アヤラ博物館 / 日本大使館	マニラ
3	9月6日(金)	コレヒドール島訪問	マニラ
4	9月7日(土)	NGO 訪問 / マニラ市内訪問 / JICA 企画調整員会談	マニラ
5	9月8日(日)	空路 マニラ→セブ (CEB ^{*3})	セブ
6	9月9日(月)	セブ市内訪問	セブ
7	9月10日(火)	University of San Carlos (1日目) 講義 / 授業見学	セブ
8	9月11日(水)	University of San Carlos (2日目) 講義 / FW ^{*4}	セブ
9	9月12日(木)	University of San Carlos (3日目) 講義 / FW ^{*4}	セブ
10	9月13日(金)	University of San Carlos (4日目) 講義 / FW ^{*4}	セブ
11	9月14日(土)	University of San Carlos (5日目) FW 成果報告会 学生交流会	セブ
12	9月15日(日)	ホームステイ (1日目) キリスト教系 NGO 団体	民泊
13	9月16日(月)	ホームステイ (2日目) キリスト教系 NGO 団 日系企業訪問 (金属加工)	セブ
14	9月17日(火)	マクタン島見学、日系企業訪問 (旅行代理店) NGO 訪問 (教育支援)、総括	セブ
15	9月18日(水)	空路 セブ→マニラ (CEB ^{*3}) 帰国 マニラ→成田 (JAL ^{*2})	

注:

^{*1} 宿泊: マニラ = ペンションハウス (マニラ市エルミタ地区)、セブ = ホテル滞在 (セブ市)、民泊 = NGO (Alay Kapwa Educational Foundation によるセブ市内での手配)

^{*2} JAL = Japan Airlines (日本航空)

^{*3} CEB = Cebu Pacific Air (セブパシフィック航空)

^{*4} FW = フィールドワーク (現地大学生とペアになりセブ市内で実施)

添付資料 B

2014 年度「多文化 FS (フィリピン)」

実施日：2014 年 9 月 4 日～9 月 18 日 (15 日間)

参加者：5 名 (男子 2 名 = 3 年生 2 名、女子 3 名 = 3 年生 3 名)

表 9. 2014 年度「多文化 FS (フィリピン)」現地プログラム実施日程表

日数	日付	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9 月 4 日 (木)	出国 成田→マニラ (PAL ^{*2}) 空路 マニラ→セブ (PAL ^{*2})	セブ
2	9 月 5 日 (金)	University of San Carlos (1 日目) 講義 / 授業見学	セブ
3	9 月 6 日 (土)	University of San Carlos (2 日目) 講義 / FW ^{*3}	セブ
4	9 月 7 日 (日)	University of San Carlos (3 日目) FW ^{*3}	セブ
5	9 月 8 日 (月)	University of San Carlos (4 日目) 講義 / FW ^{*2}	セブ
6	9 月 9 日 (火)	University of San Carlos (5 日目) FW 成果報告会 学生交流会	セブ
7	9 月 10 日 (水)	日系企業訪問 (歯科技工) キリスト教系 NGO 団体 (1 日目) ホームステイ	民泊
8	9 月 11 日 (木)	キリスト教系 NGO 団体 (2 日目) ホームステイ 日系企業訪問 (ウェディングドレス縫製)	セブ
9	9 月 12 日 (金)	海路 セブ→タグビララン リゾート開発現場訪問	ボホール
10	9 月 13 日 (土)	ボホール島見学海路：タグビララン→セブ	セブ
11	9 月 14 日 (日)	マクタン島見学 空路 セブ→マニラ (PAL ^{*2})	マニラ
12	9 月 15 日 (月)	キリスト教系 NGO 団体訪問 日本経済新聞マニラ支局長会談	マニラ
13	9 月 16 日 (火)	アヤラ博物館 / 国立博物館 / イントラムロス	マニラ
14	9 月 17 日 (水)	NGO 訪問 (日系人支援)、総括	マニラ
15	9 月 18 日 (木)	帰国 マニラ→成田 (PAL ^{*2})	

注：

^{*1} 宿泊：セブ＝ホテル滞在 (セブ市)、民泊＝NGO (Alay Kapwa Educational Foundation) によるセブ市内での手配、ボホール＝ホテル滞在 (タグビララン市)、マニラ＝ペンションハウス (マニラ市エルミタ地区)

^{*2} PAL = Philippine Airlines (フィリピン航空)

^{*3} FW= フィールドワーク (現地大学生とペアになりセブ市内で実施)

添付資料 C

2015 年度「多文化 FS (フィリピン)」

実施日：2015 年 9 月 3 日～9 月 20 日 (18 日間)

参加者：5 名 (女子 5 名 = 3 年生 5 名)

表 10.2015 年度「多文化 FS (フィリピン)」現地プログラム実施日程表

日数	日付	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9月3日(木)	出国：羽田→マニラ (PAL ^{*2}) 空路：マニラ→セブ (PAL ^{*2})	セブ
2	9月4日(金)	エコパーク訪問	セブ
3	9月5日(土)	日系企業訪問	セブ
4	9月6日(日)	マクタン島訪問	セブ
5	9月7日(月)	University of San Carlos (1日目) 講義 / 授業見学	セブ
6	9月8日(火)	University of San Carlos (2日目) 講義 / FW ^{*3}	セブ
7	9月9日(水)	University of San Carlos (3日目) 講義 / FW ^{*3}	セブ
8	9月10日(木)	University of San Carlos (4日目) 講義 / FW ^{*3}	セブ
9	9月11日(金)	University of San Carlos (5日目) FW 成果報告会 学生交流会	セブ
10	9月12日(土)	キリスト教系 NGO 団体 (1日目) ホームステイ	民泊
11	9月13日(日)	キリスト教系 NGO 団体 (2日目) ホームステイ	セブ
12	9月14日(月)	現地企業訪問 (マンゴ工場) 空路：セブ→マニラ (PAL ^{*2})	マニラ①
13	9月15日(火)	英語学校 (1日目)	マニラ①
14	9月16日(水)	英語学校 (2日目)	マニラ①
15	9月17日(木)	英語学校 (3日目) NGO 訪問 (日系人支援)	マニラ②
16	9月18日(金)	教育省 JICA プロジェクト訪問 アヤラ博物館	マニラ②
17	9月19日(土)	マニラ市内訪問、総括	マニラ②
18	9月20日(日)	帰国：マニラ→羽田 (PAL ^{*2})	

注：

^{*1} 宿泊：セブ=ホテル滞在 (セブ市)、民泊= NGO (Alay Kapwa Educational Foundation) によるセブ市内での手配、マニラ①=ホテル滞在 (マンドルヨン市オルティガス地区)、マニラ②=ペンションハウス (マニラ市エルミタ地区)

^{*2} PAL = Philippine Airlines (フィリピン航空)

^{*3} FW=フィールドワーク (現地大学生とペアになりセブ市内で実施)

添付資料 D

2017年度「多文化FS（フィリピン）」

実施日：2017年9月8日～9月19日（12日間）

参加者：12名（男子3名＝3年生3名、女子名9＝3年生9名）

表 11.2017年度「多文化FS（フィリピン）」現地プログラム実施日程表

日数	日付	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9月8日(金)	出国：成田→マニラ（PAL ^{*2} ） 空路：マニラ→セブ（CEB ^{*3} ）	マニラ
2	9月9日(土)	St. Mary College Quezon City（1日目）学生交流会	マニラ
3	9月10日(日)	St. Mary College Quezon City（2日目）市内見学	マニラ
4	9月11日(月)	St. Mary College Quezon City（3日目）報告会 英語学校訪問 空路：マニラ→セブ（CEB ^{*3} ）	セブ①
5	9月12日(火)	University of San Carlos（1日目）講義/授業見学	セブ①
6	9月13日(水)	University of San Carlos（2日目）講義/FW ^{*4}	セブ①
7	9月14日(木)	University of San Carlos（3日目）講義/FW ^{*4}	セブ①
8	9月15日(金)	University of San Carlos（4日目）FW成果報告会 学生交流会	セブ①
9	9月16日(土)	キリスト教系 NGO 団体（1日目）ホームステイ	民泊
10	9月17日(日)	キリスト教系 NGO 団体（2日目）ホームステイ	民泊
11	9月18日(月)	キリスト教系 NGO 団体（3日目）ホームステイ マクタン島訪問、総括	セブ②
12	9月19日(火)	帰国：セブ→成田（PAL ^{*2} ）	

注：

*1 宿泊：マニラ＝大学ゲストハウス滞在（ケソン市）、セブ①＝ホテル滞在（セブ市）、民泊＝NGO（Alay Kapwa Educational Foundation）によるセブ市内での手配、セブ②＝ホテル滞在（マクタン島）

*2 PAL＝Philippine Airlines（フィリピン航空）

*3 CEB＝Cebu Pacific Air（セブパシフィック航空）

*4 FW＝フィールドワーク（現地大学生とペアになりセブ市内で実施）

添付資料 E

2018年度「多文化FS（フィリピン）」

実施日：2018年9月6日～9月18日（13日間）

参加者：5名（男子1名＝3年生1名、女子4名＝3年生4名）

表 12.2018年度「多文化FS（フィリピン）」現地プログラム実施日程表

日数	日付	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9月6日(木)	出国：成田→マニラ (PAL ^{*2})	マニラ
2	9月7日(金)	St. Mary College Quezon City (1日目 ^{*2}) 学生交流会、講義	マニラ
3	9月8日(土)	St. Mary College Quezon City (2日目) 支援地訪問 ^{*3}	マニラ
4	9月9日(日)	St. Mary College Quezon City (3日目) 国立博物館、市内訪問	マニラ
5	9月10日(月)	St. Mary College Quezon City (4日目) 報告会 空路：マニラ→セブ (PAL ^{*2})	セブ①
6	9月11日(火)	University of San Carlos (1日目) 講義/授業見学	セブ①
7	9月12日(水)	University of San Carlos (2日目) 講義/FW ^{*4}	セブ①
8	9月13日(木)	University of San Carlos (3日目) 講義/FW ^{*4}	セブ①
9	9月14日(金)	University of San Carlos (4日目) FW 成果報告会 学生交流会	セブ①
10	9月15日(土)	キリスト教系 NGO 団体 (1日目) ホームステイ	民泊
11	9月16日(日)	キリスト教系 NGO 団体 (2日目) ホームステイ	民泊
12	9月17日(月)	キリスト教系 NGO 団体 (3日目) ホームステイ マクタン島訪問、総括	セブ②
13	9月18日(火)	帰国：セブ→成田 (PAL ^{*2})	

注：

^{*1} 宿泊：マニラ＝大学ゲストハウス滞在（ケソン市）、セブ①＝ホテル滞在（セブ市）、民泊＝NGO（Alay Kapwa Educational Foundation）によるセブ市内での手配）、セブ②＝ホテル滞在（マクタン島）

^{*2} PAL＝Philippine Airlines（フィリピン航空）

^{*3} 支援地訪問では、St. Mary College のソーシャルワーク学科が支援している住民プロジェクトを訪問し、現地状況についてのインタビューなどを実施。

^{*4} FW＝フィールドワーク（現地大学生とペアになりセブ市内で実施）

添付資料 F

2019 年度「多文化 FS (フィリピン)」

実施日：2019 年 9 月 6 日～9 月 18 日 (13 日間)

参加者：6 名 (男子 3 名 = 2 年生 3 名、女子 3 名 = 3 年生 3 名)

表 13.2019 年度「多文化 FS (フィリピン)」現地プログラム実施日程表

日数	日付	活動内容	宿泊 ^{*1}
1	9 月 6 日 (金)	出国：成田→マニラ (PAL ^{*2})	マニラ①
2	9 月 7 日 (土)	St. Mary College Quezon City (1 日目) 学生交流会、講義	マニラ①
3	9 月 8 日 (日)	St. Mary College Quezon City (2 日目) 国立博物館、市内訪問	マニラ①
4	9 月 9 日 (月)	St. Mary College Quezon City (2 日目) 報告会 空路：マニラ→セブ (PAL)	セブ①
5	9 月 10 日 (火)	University of San Carlos (1 日目) 講義 / 授業見学	セブ①
6	9 月 11 日 (水)	University of San Carlos (2 日目) 講義 / FW ^{*3}	セブ①
7	9 月 12 日 (木)	英語学校体験授業	セブ①
8	9 月 13 日 (金)	University of San Carlos (3 日目) FW 成果報告会 学生交流会	セブ①
9	9 月 14 日 (土)	キリスト教系 NGO 団体 (1 日目) ホームステイ	民泊
10	9 月 15 日 (日)	キリスト教系 NGO 団体 (2 日目) ホームステイ	民泊
11	9 月 16 日 (月)	キリスト教系 NGO 団体 (3 日目) ホームステイ マクタン島訪問	セブ②
12	9 月 17 日 (火)	空路：セブ→マニラ (PAL) 在フィリピン日本大使館派遣員 (卒業生) 会談、総括	マニラ②
13	9 月 18 日 (水)	帰国：マニラ→成田 (PAL)	

注：

*1 宿泊：マニラ① = 大学ゲストハウス滞在 (ケソン市)、セブ① = ホテル滞在 (セブ市)、民泊 = NGO (Alay Kapwa Educational Foundation によるセブ市内での手配)、セブ② = ホテル滞在 (マクタン島)、マニラ② = ペンションハウス (マニラ市エルミタ地区)

*2 PAL = Philippine Airlines (フィリピン航空)

*3 FW = フィールドワーク (現地大学生とペアになりセブ市内で実施)

Analysis of Planning and Managing the Overseas Experiential Learning Program: “Multicultural Field Study in the Philippines”

Yoshihiro KOBARI

The paper is an autoethnographic study of the program planning and management of an overseas experiential learning program in the Philippines offered as a credited year-long “Multicultural Field Study” course (4 units) with onsite cultural learning and fieldwork activities during the summer break (usually around a 2 week-visit in September) in the current curriculum of the Department of Multi-Cultural Communication in the Faculty of International Relations of Asia University. In addition to student safety and security, a faculty member in charge of the course (the author) is solely responsible for the planning of student activities and managing an entire program abroad and is crucially required to play multiple roles with a wide range of planning, teaching and management skills, as a producer, facilitator and coordinator in the preparatory phases and the implementation of the program.

Although autoethnography as a research method has both advantages and limitations, the study incorporates aspects of personal experience and self-observation into analytic ethnographic practice to chart a stream of work that has sought to enhance student learning in the planning and management of an overseas experiential learning program. The author’s background in academic research experience in linguistics (applied linguistics and sociolinguistics), comprehensive understanding of Philippine society and culture, and preferred view of students’

learning styles, is identified as an influential factor which has causal relationships with the nature and design of student fieldwork-based activities.

Some distinctive aspects of the Philippine program are highlighted in a series of program modifications conducted over the last 7 years (6 visits to the Philippines) from 2013 to 2019, in increasing opportunities of exchange with Filipinos and grassroots-level exposure to Philippine culture and society. These changes of the program were practically made following the “Comfort Zone Model” of adventure (outdoor/field) education based on the hypothesis that people need to go out of their comfort zone to a growth/learning zone for personal growth without dropping into a panic zone.

